ニッポン ドクター和の 臨終図巻

⑩③ 漫画原作者 小池一夫

本人も強く望んでいた穏やかな「老衰」

今や日本の漫画は世界に誇るカルチャー産業ですが、その先駆けが、70年代にアメリカで出版された『子連れ狼』だったそうです。

柳生一族の手により愛する妻を失った男が、妻の無念を晴らすために幼い息子の大五郎とともにさすらいの旅に出かける…若山富三郎さん主演の映画も大ヒットしましたよね。クエンティン・タランティーノ作品の『キル・ビル』は、『子連れ狼』の影響を受けて作られたといいます。

その後も数々の作品を生み出し、エロとバイオレンスを追求し続けた漫画原作者・小池一夫さんが、4月17日に亡くなりました。享年82。死因は肺炎との報道です。先月中旬頃より衰弱し、食事ができなくなり、病院で点滴生活を送られていたそうです。

長尾和宏（ながお・かずひろ）　医学博士。東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「薬のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

3年ほど前でしょうか、在宅の若い患者さんが、「ツイッターで、名言ばかり呟いているすごいオジサンがいるんですよ。励みになってるんです」と見せてくれたスマホの画面のアカウントに、「小池一夫」さんの名前がありました。「シトシトピッチャンのあの人？」と訊くと、「何ソレ？」。まったく会話がかみ合わなかったのを覚えています。

そう、小池さんは近年、ツイッター上で有名人であり、そのフォロワー数はなんと91万人！「めちゃくちゃいい事云うオジサン」ということで、子連れ狼を知らない若い世代のファンが急増していたといいます。

小池さんはブログで人生相談もされていました。「人生を終わらせたい…」という相談に対し、こう答えていたのが印象的です。〈以下小池氏ブログより抜粋〉

「生まれる前は『無』です。自分が死んだ後も『無』です。（中略）自分は、永遠のほんの一瞬を生きているだけです。僕も、死んだ方が楽だな、というような地獄も経験しました。何度もありました。しかし、80才になって出した結果は、『死ぬまで生きてやる』です。僕を好きでいてくれる人のためにも長生きしたいし、僕を嫌いでいる奴らのためにも、嫌がらせで長生きします。人間の死因は、「老衰」がいちばんの幸せです。そして、それは、ただの老衰ではありません。死ぬ一瞬前まで、ハッピーでいることが、大切な人のためであり、敵に対する最大の復讐です」

なんという説得力。老衰がいちばん幸せとは…。小池さんの死因は肺炎とのことですが、限りなく老衰に近い穏やかな死であったと想像します。なんと、亡くなる当日までツイッターを続け、最期の呟きは、先ごろ亡くなったモンキー・パンチさんへの追悼の言葉でした。「淋しくなるなあ」と。

連載当時、『子連れ狼』と『ルパン三世』はライバル関係だったとか。事実は漫画より奇なり、です。